ロジスティクス放談

医薬物流のここだけの話

大塚倉庫代表取締役社長　濵長 一彦

［第5回］

物流業界は遅れている（その2　IT化）

前号では、なかなか古い体質から抜け出せない物流業界の現状を皆さんに知っていただきたく、日々使用する「紙の伝票」を例に、業界に蔓延る「属人化」と「IT化の遅れ」のお話をした。そして物流業界発展に欠かせない視点が「標準化」であることを訴えた。本号では業界に一石を投じるべく、汎用性のある「標準化」を視野に入れた当社のIT化を紹介したい。

業界×IT

昨今、IT化が強く叫ばれている。

新聞、経済誌、マーケティング雑誌などをみてもIT化による業界の変革や企業の成長などたくさんの事例が溢れている。当社の属する物流業界と類似の問題を抱えていたタクシー業界の変革から少し考察してみたい。

私も東京でタクシーに乗ることがよくあるが、乗車時にドライバーへ目的地を告げると、その目的地まで最も適した最短ルートで運んでくれる。ひと昔前なら国道○○号線を北に5キロ進み、○○の交差点を右に左にと道順を説明しながら乗車したが、説明なしで目的地に到着できるベテランドライバーは少なく、そこまでの育成に時間がかかったわけである。

近年ではカーナビゲーションが誘導してくれるようになったため、ドライバーは一番困難とされた地理と道路事情の知識を培う必要がなくなり、誰でもタクシードライバーになれるようになった。

さらに、タクシー業界にはIT企業のウーバー社が利用者の利便性を追求したアプリを登場させたことで、新しい顧客の創造で賑わいをみせている。

この事例の興味深い点は、タクシー業界が知恵を絞って開発した仕組みではないことである。まったく関係ないIT企業ウーバーのアイデアにより変革していったことが面白い。

このような異業種のIT化の事例も参考にしながら当社もIT化を推進していくことになる。

物流×IT（ID運輸）

当社はこれまで３PL企業として、物流のサプライチェーン全体を俯瞰して改善を提案する企業活動を続けてきた。とりわけ運送効率を上げる為の拠点配備とか、倉庫内の作業効率化などの提案が得意領域で、倉庫から出荷される商品の配送はパートナー企業（運送会社）へ委ねていた時期があった。一昔前はこの関係がバランスを保ちうまく機能していたと思う。

しかし、昨今の厳しいドライバー不足によって状況は一変し、パートナー企業担せにせず、当社自らメーカー側へ物流効率化の為の要請や、卸売りへの納品時の条件緩和を行っていたが、中々成果を出せずにいた。そこでウーバーのような発想によるITを導入して課題を解決する方法を検討し始めたのである。

最初のアクションはトラックの動きを可視化することのメリット（ニーズ）は何があるかを洗い出した。

①メーカーのニーズ⇒自分達の商品がどこにあり、いつ頃到着するのか知りたい

②卸売りのニーズ　⇒商品がいつ到着するのか知りたい

③運送会社のニーズ⇒配送中のトラックの状況をリアルで分かれば次の配車が組みやすい

などである。

要するに、トラックの動態管理（可視化）は全ての物流関係者のニーズであることを再認識し、これが実現

写真１　トラックへスマートフォンを配備し、その動態をネット上でリアルタイムに確認できる

できれば運送面と業務面の効率化が図れると考えた。トラックの動態管理ができるIT（当社のシステム名：ID運輸）を開発していくことになる。

さらにこの「ID運輸」を開発した別の理由にも言及しておきたい。

一口にIT化といっても巨額な投資は運送会社には重い。しかも単独で開発を進めれば、各社バラバラの仕組みができてしまう。これではいつまでたっても標準化などは進まない。業界全体を横断できる一つのパッケージ的な仕組み作りが重要となるわけだ。そこで当社は積極的にIT化に向けた投資を行い、全国のパートナー企業に使ってもらうことのできる汎用性の高いこのID運輸の仕組みを開発していった。まさに業界標準化への挑戦である。

さらに、このID運輸へ色々な機能を追加していった。上記の①～③への対応はもちろんのこと、様々な機能が評価を受け当社のお客様や全国のパートナー企業に使用していただいている。

さらなる業界標準化にむけて

今、ID運輸の機能の中で「E伝票」という仕組みを推奨している。

E伝票とは、紙の伝票を電子化した納品伝票に納品時商品の写真を付与したものである。電子伝票に写真を付与することでメーカー・卸売り・運送会社の事後確認を容易にするもので、納品時検品作業の効率化だけでなく、トラックの待機時間も解消できる画期的な仕組みである。

すでに全国の卸売りにこの仕組みの導入を働きかけているが、なかなか理解は得られない。「大塚さん10年早いよ」「大塚だけ特別扱いはできない」と後ろ向きの返答が多い。

紙の伝票が無くなるメリットを理解しているにも関わらず、あと10年間も紙の伝票を続けなくてはならないかと思うとやりきれない気持ちになった。

標準化を目指す為に必要なこと

ID運輸の開発に着手した当初は、トラックの動態を可視化することで非稼働時間を極力無くし、稼働率を向上させることにあった。またそれにより、ドライバー不足に悩む運送会社を支援することにあった。この取組みの有効性が評価され、2015年度ロジスティクス大賞を受賞した。目的の第１段階は達成したといえる。

しかし、この時点においても効率化は運送会社の改善の域を超えることはない。なぜなら、メーカーや卸売り各社各様の要望に応える為に、個別最適で対応しているからだ。いくらトラックの動態を可視化しても個別で対応するわけだから効率化は図りづらい。更なる効率化を求めた取り組みを深化させていくには、サプライチェーンに携わる関係者が一体となった取り組みが必要不可欠であると考える。

だからこそ、メーカーの物流会社である当社の役割として、メーカーや卸売りを巻き込み、ITを活用した業界全体の標準化を目指さなければならないと思ったわけである。

進化を続けているID運輸の取り組みは進んでいる。本年1月より大手医薬品卸売りと協業でE伝票を活用した検品レスを実現し、サプライチェーン上におけるメーカーと卸売りの物流効率化を実施し始めた。業界においては画期的な出来事だと自負している。当社は将来この取り組みを基本に、業界へ波及させ、業界全体の標準化の礎にしていきたいと思う。

写真２　納品先にてスマートフォン上のE伝票にサインをもらっている様子